



美・味・品の三拍子揃った幕の内弁当を

永井裕明

岩絵具、鉛筆、和紙などを用いた画家・牛島孝さんの作品を中心に、活版印刷や写真などデザイン要素も加えながら各素材を吟味して、印刷ならではの表現に置き換えることで新しい表現を探ってみました。一つひとつをていねいに仕上げた幕の内弁当のような作品です。

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●制作コンセプト

めざしたかったのは単なる高度な複製を超えた、オフセットなりの表現です。そこで顔料、金箔、墨、和紙など多彩な材料を使いこなして表現活動をしている画家の牛島孝さんに協力をお願いすることにしました。江戸時代になぞらえれば、彼は絵師、凸版さんは刷り師。僕はアートディレクターだから企画する人ということになるのでしょうか。彼の絵を中心に、トライアルを通してテストピースをたくさん積み重ねて可能性を広げていきました。このトライアルは、高木春山の図説『本草図説』をお手本にフォーマット化し、僕の大切な記録として冊子状にまとめました。

最終的には活版印刷や写真、グラフィカルな表現なども加えつつ、トライアルで見つけた表現や技術を集約し、作品にまとめました。イメージは高級で品のいい幕の内弁当です。厳選した素材を使い、ひとつずつ吟味しながら手問ひまかけて料理し、美しく品よくバランスを考えて盛り込んで高級料亭風をねらってみました。

●印刷物の魅力

印刷とはそもそもアバウトなものです。印刷物と元の原稿とでは紙も材料も方法も違うのだし、依頼したとおりに仕上がるとは限らない。再現性も常時ドンピシャにできるわけではないし、僕と印刷の現場とに解釈のズレがあったり、もしかしたらミスだって起こる。でも、その一切合切が実は美的な部分や面白さに繋がる表現としての可能性をはらんでいる。この部分を引き出すためにも、できるだけ解釈の余地のある言葉で、印刷側に委ねたい、という意識があるんです。

とはいえ、そういう振れ幅が生まれるためには状況は必要となります。背骨となるイメージをアートディレクター側はしっかりもっていて、それを伝えられる技術的な言語もある程度もち合わせていなければならない。かたや印刷側には受け入れ体制が必要となる。僕らが委ねてもいいと思えるような、イメージを解釈して提示できる専門的な知識と経験を有したプリンティングディレクターのポジションが重要になってくる。

●印刷表現の可能性

なんといっても「餅屋は餅屋」ですからね。イメージの解釈もいろいろあれば実現するテクニックもたくさんある。僕らはそのやりとりのなかで覚えたことは、また次の仕事に反映させていくことができる。

表現という領域は挑戦しなければ先にはいけません。「過ぎたるは及ばざるがごとし」と言いますが、この世界はできないことを知ることで、初めて拡張できる。過ぎてみなければ「およぶ」かどうかわからないし、過ぎたときには「ああ、行き過ぎたな」とわかる。たとえ失敗しても恥をかいても、それはそれで学習になる。僕自身も時間もコストも限られている仕事ですら、どうかトライアルする余地をつくりだしては挑戦を続けようと努力しています。

だから、決着をつけるまでトライし続けられる今回は僕にとって絶好のチャンスという感じでした。ふだんなら結論ができるまで突き詰めていけることはなかなかないし、途中であきらめて従来の方法へと方向転換せざるを得ないことは多々あるのが現実です。それが今回はあきらめる必要がないわけですから、これはかなり楽しいことになりました。

——永井裕明

TRIAL PROCESS

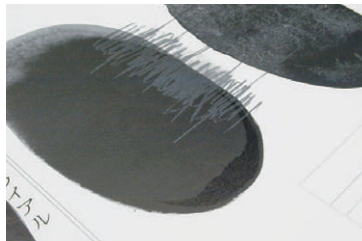
トライアルプロセス

永井裕明 × 森岩麻衣子 (PD)

日本画表現と グラフィカルな表現を 印刷で試す—その1

「墨・岩絵の具の黒」

原稿には、墨（高滑、青龍胎）、岩絵の具、鉛筆を使用。ポイントは墨の膠溜まりやにじみ、岩絵の具のざらりとした質感。これらを再現するために、ブラックはハーフマット、グロス、銀混入など5種類の特色を使用した。



右から2番目の黒。下部の膠溜まりをグロス感のある特色のブラックで再現

トライアルの過程も含めて作品にできるようフォーマットを準備し、一つひとつのテストを組み立てていく。それらを積み重ねて可能性を広げ、最後に作品へと仕上げるという試み。牛島氏の日本画の表現を印刷ならではの表現に置き換えるために、まずは異なる質感の黒、素材の重なりなどのテストを行い、グラフィカルな要素として、インキの隠蔽性やモノクロ写真の再現性を確かめた。



版の構成：ブラック（共通フォーマット）→特色ブラック（ハーフマット）→特色ブラック（グロス）→特色ブラック→特色ブラック→特色ブラック（銀混入）→銀

「金箔」

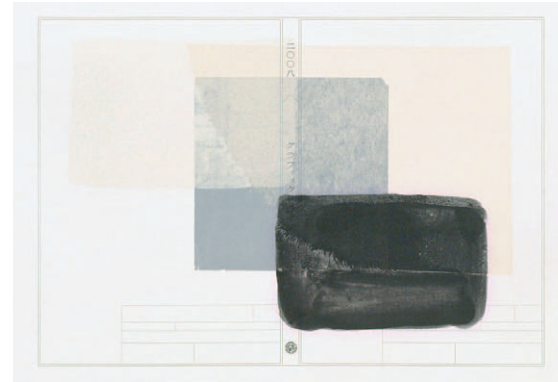
原稿には、永井氏が大切に保管していた古い箔の転写用油紙を使用。金箔や油紙の物質的な表現がどこまでできるかを試した。油紙の質感を考慮し、白い薄紙のほかに透けた色紙（シーブスキン）を使用した。



箔の剥がれ具合や微妙な調子を金、銀、オレンジで再現



版の構成：ブラック（共通フォーマット）→ホワイト→特色銀→特色金→特色オレンジ



版の構成：ブラック（共通フォーマット）→特色銀→特色ホワイト→ホワイト→特色ブラック（ハーフマット）

「箔・和紙・墨・胡粉の重ね」

原稿には、銀箔、墨（高滑）、和紙（土佐典具帖紙）、胡粉を使用。ポイントは箔の質感と、それに重なった和紙、胡粉の質感、墨のにじみ。これらの微妙なニュアンスを際立たせるために硬調の製版とした。



和紙の繊細な質感や墨のにじみ、はじき具合などの再現はオフセットならではの



版の構成：ブラック（共通フォーマット）→特色銀→イエロー→イエロー→イエロー→ホワイト→ホワイト→ホワイト

「隠蔽」

原稿には、永井氏が今回のトライアルのために制作したマークのデータを使用。その上に隠蔽用のイエロー版、ホワイト版をベタ版で1度から3度まで刷り重ねて、マークや地色の銀をどれだけ隠蔽できるかを試した。



銀の上にホワイトを3度まで刷り重ねても、予想していたほどの隠蔽効果はなかった



版の構成：ブラック（共通フォーマット）→特色グレー→特色ブラック→透かしインキ

「写真の粒状感」

原稿には、写真家の市川弘氏による写真作品（紙焼）を使用。それを“T”字型のマスク版で切り抜いたものをレイアウト。モノクロ写真の濃淡と粒状感をダブルトーンで再現し、透かしインキでマークを刷った。



写真の表現では中間のボリュームが鍵となった

TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

永井裕明 × 森岩麻衣子 (PD)

日本画表現と グラフィカルな表現を 印刷で試す—その2

「雲母(きら)」

原稿には、墨、方解末、2種類の雲母を使用。ポイントは雲母のきらめきや方解末のざらりとした質感。4色をベースに、きらめきの再現のために銀にパールを混入したインキなども使用した。



方解末の結晶のような白はホワイトを使って紙地と区別し、ざらりとした質感はパールを混入した銀で再現した

「鉛筆」

原稿には、7Hから9Bまでの鉛筆を使用。ポイントは鉛筆の硬さで異なる色や光沢、線の勢いや筆圧などをどこまで再現できるか。原稿はモノトーンだが、あえてCMYの3色を主体に設計し、独特の質感を特色で補った。



CMYの3色を主体に鉛筆の硬さの微妙な差を際立たせた

写真製版のテクニックをうまく取り入れて、特色をベースに素材の繊細な質感を再現した先のテスト。今回は雲母(きら)、鉛筆、色のテストをプロセス4色をベースにその色味を生かして行い、鉛筆と砂子(散らした箔)の重なるのテストを特色で行った。そしてグラフィカルな要素として、オフセット印刷での活版原稿の再現性を確かめた。これらのテスト結果をどのように作品へと昇華させるのだろうか。



版の構成: ブラック(共通フォーマット)→プロセス4色→ホワイト→特色銀(パール混入)→特色銀(パール混入)



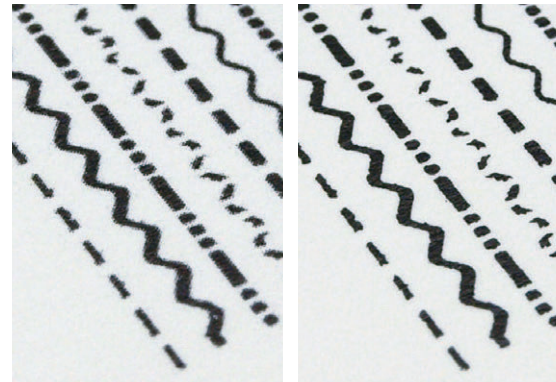
版の構成: ブラック(共通フォーマット)→プロセス4色→特色ブラック→特色銀



版の構成: ブラック(共通フォーマット)→CMY(Kaleido)→特色蛍光グリーン→特色パール→特色パール



版の構成: ブラック(共通フォーマット)→特色ブラック→特色銀→ブラック→特色銀(パール混入)→特色銀(ブラック混入)



ノーマル分解では滲んだような階調が出る 階調のない凸掘りで再現したもの

「岩絵の具・水干の色」

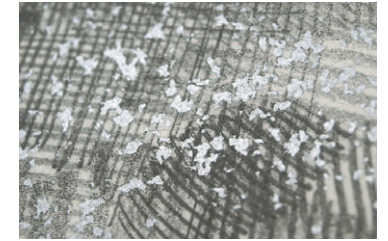
原稿には、岩絵の具(3種類)、透明水彩、水干(3種類)、方解末、雲母(2種類)を使用。ポイントは水干に混ぜた雲母や方解末の効果、色彩の鮮やかさの表現など。鮮やかさの再現のために広演色インキ「Kaleido」を使用した。



水干に混ぜた雲母の透明感のあるきらめきや、ざらりとした質感には特色パールを使用した

「鉛筆と砂子のスクリーン」

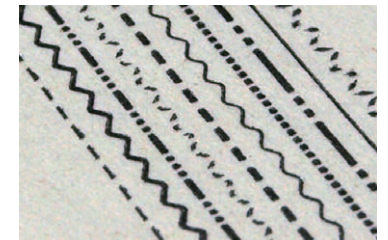
原稿には、5Hから2Bまでの鉛筆と銀箔を使用。ポイントは鉛筆の重なりから生まれる奥行きと、砂子(銀箔)の複雑な輝き。鉛筆はトリプルトーンで製版。銀箔はダブルトーンで、ベタ版と硬調な調子版で構成した。



銀箔はパールを混入した特色銀の上に、ブラックを混入した特色銀で調子をつけた

「活版の再現」

原稿には、活版の罫を活版印刷で刷ったものを使用。当初はノーマル分解で再現を試みたが、活版特有のシャープな質感を再現できなかった。最終的には漫画原稿などの取り込みに使われる“凸掘り”を採用した。



原稿は印刷博物館にある体験工房「印刷の家」で刷られた

AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

あらためてオフセット印刷の面白さを味わった、という感じですね。日ごろからいつも使っている版式で見慣れすぎてしまい、どちらかというと活版のように物質性に興味がいきがちになっていた気がしていたのが、トライアルで再発見した気分です。

オフセット印刷は確かに皮膜の薄い版式で、隠蔽性に欠けるし、インキの粒子や物性をそのまま再現することは困難だと確認させられました。できること、できないことがトライアルを通じて明らかになるなかで、浮上したのが写真製版のテクニックです。考えてみれば、写真表現に擬似的な表現をうまく取り入れるのはオフセット印刷本来の表現の、いわば「騙しのテクニック」。これを徹底的に駆使することで、どこまでオフセット印刷の限界を振り切れるか。それは実に興味のつきないトライアルで、これまで自分がオフセット印刷に抱いていたイメージがかなり覆された感があります。

一方で、なくなりつつある技術のことも知る機会となりました。シャープな線が再現できる凸撮りが一部の特殊な世界以外で用いられなくなったことも知りました。もはや主流ではないなど理由があるのはわかる反面、古い技術を追いやってしまうという流れにはやはり疑問を感じています。

ともかくにも牛島孝さんとの出会いから始まり、オフセット印刷の「騙しのテクニック」、技術の変化といろいろなことを実感しながら最終的に5枚のポスターにまとまりました。金沢から牛島さんが届けてくれた最上の素材、プリンティングディレクターの森岩さんをはじめとする極上の料理人、実に贅沢な「幕の内弁当」となりました。

——永井裕明



●プリンティングディレクターから

永井さんのトライアルの進め方はとても明快で、一つひとつの原稿に対し何ができるか、どこまでできるかを明らかにしていき、それを積み重ねて最終ポスターにまとめていくという作業でした。個々の内容は濃く、複雑でしたが、一步一步着実に取り組ませていただきました。日ごろから、印刷はオリジナルのもつ良さをいかに抽出して、実物にどれだけ近い感動を与えられるかを目標にしていますので、牛島さんの絵を再現するトライアルはとても興味深いものでした。

とは言え、オフセット印刷は物質性の表現が得意な版式ではありません。牛島さんの絵を再現する上で、岩絵の具や雲母の物質感は重要な要素でしたので、いろいろ実験してみた結果、写真製版ならではの「見せかける」テクニックでの再現をめざすことにしました。今回のトライアルで私自身も写真製版の技術力の高さにあらためて気づかされました。

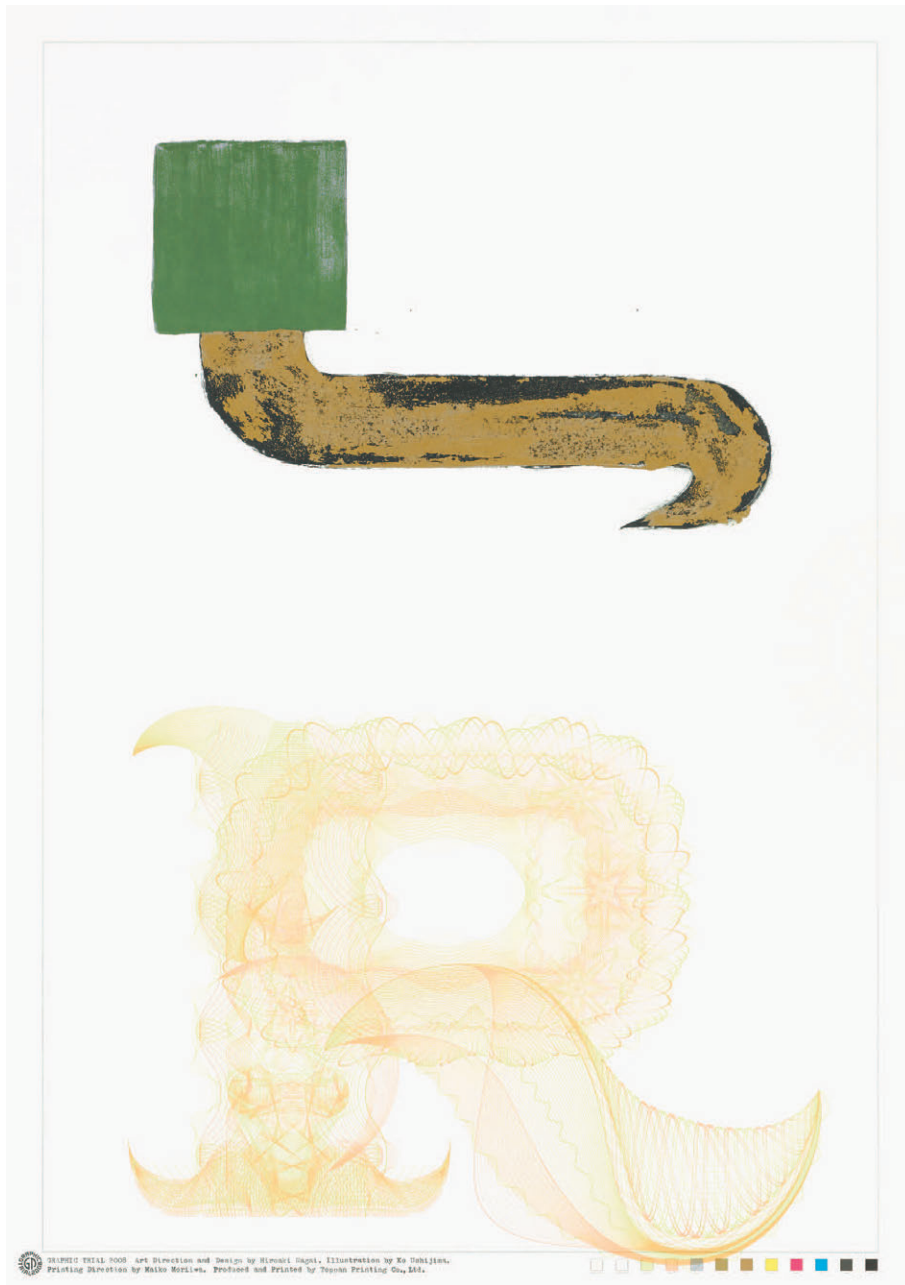
ていねいで細やかな美しさをもつオフセット印刷は日本料理のようなもの。その繊細な味わいを存分に生かした「幕の内弁当」に仕立ててくださったと思います。

——森岩麻衣子



用紙：ヴァンヌーボ F / ナチュラル 四六判 135kg

版の構成：ブラック→プロセス4色→特色ブラック→特色グレー→特色グレー（DIC 523）→超光沢メジウム



用紙：ヴァンヌーボ F / ナチュラル 四六判 135kg
 版の構成：ブラック→プロセス4色→金（青金+赤金）→金（青金）→銀→特色オレンジ→特色グリーン→マットニス→超光沢メジウム



用紙：ヴァンヌーボ F / ナチュラル 四六判 135kg
 版の構成：ブラック→特色オレンジ→特色オレンジ→特色ブラック→特色グレー→特色グレー→超光沢メジウム



用紙：ヴァンヌーボ F / ナチュラル 四六判 135kg
 版の構成：ブラック→プロセス4色→銀→金→ホワイト（パールメジウム混入）→パールメジウム（ホワイト混入）→パールメジウム（ホワイト混入）



用紙：ヴァンヌーボ F / ナチュラル 四六判 135kg
 版の構成：ブラック→特色赤→銀→銀（ブラック混入）→特色ブラック（ハーフマット）→特色ブラック（ハーフマット）→超光沢メジウム

FINISH

全作品とディテール

